
IS ~ Blue Destiny ~

戦場の絆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〈Blue Destiny〉

【Nコード】

N9816T

【作者名】

戦場の絆

【あらすじ】

名実共に世界最強、しかし女性にしか扱えないとんでもない欠陥品でもあるマルチフォーム・スーツ『インフィニット・ストラトス』。その発明者である篠ノ乃東には、一人の養子がいた。彼はひよんなことからISを起動してしまい、世界を震撼させたのだった

私は小説初心者ですので、どうか生暖かく見守ってください。

プロローグ

時は現代。「インフィニット・ストラトス」（通称IS）という、何故か女性にしか扱えない宇宙開発のためのマルチフォーム・スーツの登場によって、男女のパワーバランスは崩れ、女尊男卑の時代が訪れていた。

某所のとある部屋。

明かりはほぼ無く、数枚のディスプレイの光と、スイッチか何かの光が煌々と輝くその部屋に、一人の女性の姿があった。

「うーん、やっぱり現行機じゃ耐えられないかあ……」

一枚のディスプレイを見つめながら女性が呟く。

彼女の名前は篠ノ束。たった一人でISを発明した、世界中が認める天才。

そんな彼女を悩ませているのは、ここに居候している一人の男の子が考案、製作したあるシステムの事だった。

『EXAMシステム』と名付けられたそれは、搭載したISの限界性能を引き上げられるシステムである。しかし、底上げされた性能に現行機は耐えられず、唯一耐えられたのは、束が製作した一機のISのみであった。

部屋のドアが開き、その男の子が入ってくる。彼の名前は『ユーグ・ラインブルグ』。幼少時に両親に捨てられていたのを束が引き取り、半ば強引に養子とした。他人との接触を極端に拒む彼女が、彼を引き取った理由は不明だが、束は自らの弟としてユーグと接し、ユー

グもまた、自らの姉として束に甘えた。今では二人の間には、誰にも壊すことのできない絆があった。

「束姉、調子はどう？」

「システムは完璧なんだけど、現行機のほうが耐えられないみたい。これだと最悪空中分解の可能性もあるね」

「とすると、こないだ作った『1号機』しか耐えられ無いと？」

「そういうこと。まるで単一仕様だね」

「じゃあ1号機にシステム積んでくる」

「オツケー。はいこれ」

束はパソコンから記憶端末を取り出してユীগに渡す。

ユীগはそれを受け取ると、隣の作業室へ移動した。

そこには、『B・D・(ブル・デステイニー) 1号機』と名付けられた、全身装甲のISが一機、大量のコードに繋がれていた。

ユীগはノートパソコンを1号機に繋ぐと、カチャカチャと操作を始める。

少しして、ノートパソコンの画面に文字が表示されてきた。

各機能異常無し

パスワード「*****」認証

”Blue Destiny” 起動

1号機の頭部バイザーに光が灯る。ちゃんと起動できたようだ。

EXAMシステムを1号機の記憶領域にコピーし、インストールを三十秒ほどで終了した。

束が作業室に入ってきた。

「これで一応、二人で作った初めてのISだな」

「ゆう君はほとんどEXAMシステムだけだったけど。でも初めてISの作業をしたにしては上出来じゃないかな」

「作業はともかく、システムは八十点くらいはくれるって事？」

「いや四十点くらいかな？」

「手厳しいな！」

「この束さんに見てみれば、ゆう君はまだまだ修行が足りないのだよ！」

多分世界中のプログラマーが束になろうと勝てないこの人から合格点は貰えない。そう思ったユーグだった。

何はともあれ、これで作業は終了だ。

感慨深くなって、ユーグは1号機の肩部アーマーにポンと手を置いた。

その時だった。

ユーグの体と1号機が光り始める。

異変に気付く前に、ユーグは光の中に取り込まれた。

約三十秒後。

全身にB・D・1号機の装甲を纏ったユーグがそこにいた。

「な……」

一瞬思考停止するユーグ。

そして次の瞬間。

「何じゃこりゃあああああっ!？」

部屋を揺るがす大きな声が響き渡った。

プロローグ（後書き）

はじめまして、戦場の絆と申します。

この作品と呼べるかどうかわからないものを見つけていただき、感謝です。

不定期更新になると思いますが、今後もよろしくお願いします。

入学試験 1 (前書き)

プロローグは三人称視点ですが、これからは、主にオリ主の視点で書いていきます。

入学試験 1

「聞いて聞いてー！ゆうくんがIS動かしちゃったんだよー！」

隣で束姉が誰かと電話で俺のことを喋っている。

俺は戸惑いつつも、B・D・1号機を纏った体を動かしていた。特に不自由は無いが、女性にしか動かせないISを、男性である俺が動かしているという事実には、不安とドキドキが入り混じったような感覚になる。

「ゆうくん、大事なお話があるから電話代わってくれないかな？」

「分かった。1号機の回線に繋げる？」

「おっけー」

数秒後、バイザーに小さく表示が出て、回線が繋がった。

「もしもし、ユーグ・ラインブルグです」

「IS学園の織班千冬だ。久しぶりだな、ユーグ」

織班千冬さん。束姉のお友達で、俺も以前会った事がある。

ISの世界大会で優勝、「ブリュンヒルデ」の称号を持つ女性。一言で言うなら「強い女性」。つか人類最強。

「何年ぶりでしょうね、あなたと話すの」

「三年から四年くらいだな。早速だが本題に入る。

「IS学園に入学しろ」

「強制ですか？」

「ああ。何せ男性で二人目のIS操縦者だからな」

二人目：？俺以外にいたとは。

「あの、一人目って誰ですか？」

「知りたいか？」

「いや、別にいいですけど」

ちっ、聞けなかった。

何はともあれ、これで俺はIS学園に通うことになったのだった。

数日後。

「じゃ、がんばってねー！」

束姉に送ってもらって、俺は今IS学園の目の前にいる。

俺がISを動かせると分かったのが入学試験終了後だったので、今日は臨時に俺の試験が実施される事になったのだ。

試験は1対1の対戦形式。

ちなみに昨日まで、束姉に「試験前の猛特訓」と称して、束姉作の無人IS「ゴーレム？」と嫌というほど模擬戦をさせられていた。

しかもワンパターンじゃ練習にならないと、一戦毎のゴーレム？の思考ルーチン変更付きだ。最適化どころか一次移行まで終わり、今では俺にとって1号機は手足も同然の状態であった。

改めて学園を見てみると、デカイ。とにかくデカイ。とてつもなくデカイ。

こりゃとんでもない所に来てしまったなと、ちよつと怖くなった。向こうから小走りで近づいてくる人が二人。

「待たせたな、ユীগ」

一人は千冬さんだった。

「そんなに急がなくても良かったのに」

「ちよつと会議があつてな、遅れるかもしれないかと思つたが、案外そうでも無かつたな」

千冬さんの隣にいる人は誰なのか。童顔で背も低いものの、スタイルはそれに似合わない程整っており、胸なんかめちやくちやデカい。とにかくこちらの方は誰なのか聞いてみる事にした。

「千冬さん、こちらの方は？」

「ここでは織班先生と呼べ。こちらは山田真耶先生。試験の対戦相手だ」

「はじめまして、ユীগ君。山田真耶です。よろしくお願いします」

ぺこつと頭を下げる山田先生に、こちらも一礼する。

「こちらこそ、今日はよろしくお願いします」

「時間が余り無いのですぐ始める。ユীগ、付いて来い」
「了解」

俺は千冬さ…織班先生と山田先生に連れられ、試験会場の第二アリーナという所まで来た。

「そこの更衣室で着替えて来い。急げよ」

「分かりました」

俺は更衣室に入ると、ロッカーにバッグを入れ、束姉お手製のISスーツに着替えた。

女性用、ひいては一般のISスーツは、スクール水着の様な形になっており、さすがにこれを着るのは気が引けるので、束姉に頼んで作ってもらったのだ。Tシャツ型の上半身用とスパッツ型の下半身に分かれている。それに着替え、更衣室を出た。

入れ替わる様にして山田先生が更衣室に入る。

山田先生が着替え終わるまでの間、織班先生からルールを聞いた。

「これからお前にはISを使用しての模擬戦を行ってもらおう。相手は先程も話した通り山田先生だ。相手のシールドエネルギーを0にすれば勝利、自分のシールドエネルギーを0にされると敗北だ。知っているかと思うが、ISには絶対防御という機能があり、操縦者の身体が危険に晒される事は基本的に無い。ただし絶対防御が発動するとシールドエネルギーを極端に消費するから注意しろ。まあ、男である時点で半分合格確定みたいな物だから、腕試しと思ってやってみるといい」

織班先生がそこまで言い終わった時、ISスーツに身を包んだ山田先生が更衣室から出てきた。童顔ながら豊満な先生の体。

その中でも一際目を引く胸の双丘はスーツに締め付けられ、苦しそうに張り出していた。

俺は慌てて先生から目を逸らした。

これ以上見ていたら確実に理性が終わる。

待てよ？IS学園にいる以上、大量の女子の中で生活しなくてはならない。

つまり、ISの実習授業があれば、どうしてもISスーツを着た女子達と一緒に授業を受けなければならないという事か。

ワオ。

本当にとんでもない所に来てしまったと、俺は軽く落ち込んでしまったのだった。

入学試験 2

「じゃあ先に出てますので、ユーグ君も早く来てくださいね」

フランス製第二世代IS「ラファール・リヴァイヴ」を装着した山田先生が、カタパルトに立ちながらこちらに話し掛けてくる。

「はい。：俺、全力で行くんで、先生も全力でお願いします」

「随分自信があるんですね」

「そんなことは無いですよ。ただ、勝負をするなら全力で、っていうのがモットーなだけです」

「ふふっ、分かりました。じゃあ、待ってますから、早く来てくださいね」

そう言い残し、先生はカタパルトに押し出されてアリーナへ舞い上がった。

残された俺は、1号機の待機形態である左手のブレスレットを見る。

「いよいよ初陣か…頼むぞ1号機！」

一瞬で1号機を纏うと、俺は各部チェックを開始した。

ジェネレーター出力 100%正常

各機能異常無し

メインスラスター出力 100%正常

アポジモーター 全基正常

武装情報

専用小型マシンガン…使用可能

胸部バルカン砲：使用可能

胸部有線ミサイル：使用可能

ロケット・ランチャー：使用不能 代替装備 専用小型マ

シنگアン用予備弾倉×40

ビーム・サーベル：使用可能

ALL CHECK GREEN Blue Dest

iny 起動

カタパルトに脚部を接続、腰を落として射出体制をとる。

「ユーグ・ラインブルグ B・D・1号機 行きます！」

俺はカタパルトに押し出されて、アリーナへ飛び出した。

アリーナの真ん中で、山田先生が俺を待っていた。

「先生、お待たせしました」

「はい。ユーグ君、準備はいいですか？」

「ええ、いつでもどうぞ」

俺と先生は軽く身構える。

数秒後、試合開始のブザーが鳴った。

軽く間合いを離すと、右手にマシンガンを呼び出して、先生の進行方向に置くように連射する。

先生はそれを造作なく避けると、アサルトライフルを呼び出して射撃を開始した。

こちらでも回避するが、先生の回避行動に比べると動きに無駄がある。この射撃合戦、腕でも経験でも、明らかにこちらが不利である。さて、どうするか。今有線ミサイルを撃ち込んでも、易々と回避されるか迎撃されるかの二択だろう。瞬時加速して格闘戦に持ち込もうとしても、待っているのは迎撃による仕切り直し。かといってこのままチマチマ射撃戦をしていてもジリ貧だ。

俺はマシンガンを連射しながら有線ミサイルを二発発射した。同時に機体を急上昇させる。

先生は一発目をかわすと、二発目をアサルトライフルで撃ち落とし、マシンガンの弾を避ける為に進行方向を変えた。

…まさか上手く行くとは思わなかった。

ラファールの背中にミサイルが直撃し、先生は驚きに顔をしかめる。当たらなかつた一発目のミサイルの軌道を変更したのがバレないように、わざと大袈裟な動き方をしたのだ。

衝撃でよろける先生を見て、マシンガンを左手に持ち替え、右手でビーム・サーベルを引き抜くと、瞬時加速で切りかかった。

そう。俺は油断していた。

先生の左手から球体の「モノ」が投げられる。

「しまっ

」

瞬間、シールドを構えるが、球体はシールドに当たると爆発し、こちらのシールドエネルギーを削る。

爆発の瞬間かなりの量の煙が発生し、視界を遮られた。

さっきのは手榴弾を兼ねた煙幕だったのか。
後ろにブーストすると、目の前の煙の中から先生が実体剣を片手に突っ込んできた。
とっさにサーベルを振り、鏢迫り合いに持ち込んだ。
使うなら…今だ。

そう思考した瞬間、視界が一瞬赤くなり、バイザーに文字が表示された。

EXAM system standby

サーベルの出力が急激に上昇し、実体剣を真つ二つに切り裂く。
驚きながら瞬時加速で後退する先生に対し、マシンガンを捨てながら瞬時加速を使った。

さっきまでとは比べ物にならない反応速度に驚きつつ、一瞬で先生の目の前に近づき、右から左へ一閃、左手もサーベルを抜いて逆手に持ち、そのまま5〜6回斬撃を加えた。

試合終了のブザーが鳴る。

「試合終了。勝者、ユীগ・ラインブルグ！」

織班先生が、そう宣言した。

数十分後、俺たちは食堂で飲み物を飲みながら話をしていた。

「ユীগ君、参りました」

「俺の力じゃありません。こいつ…1号機がすごいんですよ」

実際、EXAMが無かったら勝てたかどうか分からなかった訳だし。

「だが自らを囷にしてミサイルを当てに行くなどという芸等をする奴は初めて見た。短期間でこれだけの事ができたんだ、自信を持ってテーブルに置かれた小型ディスプレイに、先の模擬戦の映像が映し出されている。

その中の俺は、EXAMを発動させて実体剣を真つ二つにしたところだ。

「これがEXAMシステムというものか？」

織班先生が問いかけてくる。

「ええ。あれで限界性能を底上げしたんです。1号機は上がった性能に耐えられるように作ってありますが、IS本来の性能って訳じやありません」

「織班先生、そろそろ身体測定の間では？」

山田先生が時計を見て言う。

「そうだな。ユীগ、行くぞ」

「はい」

席を立ち、山田先生に一礼する。

「ありがとうございました。今日は本当に勉強になりました」

「こちらこそ、自分の未熟さを教えられました。機会があれば、授業で会いましょう」

こちらに軽く一礼すると、山田先生は食堂から出て行った。

「ユーグ、行くぞ」

「了解です」

その後、身体測定等、予定されていた全てのことを終えた俺は、束
姉に迎えられ、「家」であるラボまで帰ったのだった。

入学初日（SHR）

数日後。

IS学園で授業を受ける最初の日である。

SHR前、暇なので小型ディスプレイに1号機のデータを出す。

束姉がロケット・ランチャーの弾頭に調整を入れ、クラスター弾と鉄甲弾を作ってくれたので、スラスター出力調整も兼ねて近々アリーナを借りてテストをするつもりだ。

にしても、周りの視線が痛い。あれは獲物を見つけた狩人の目だ。受けだの攻めだのひそひそしゃべってる奴もいるが、余り興味もないし、聞いてしまったら、もう元に戻れなくなる気がするので聞かないことにしている。

「ラインブルグ…君だよな？」

後ろから声をかけられて振り返る。

そこには、俺のものと同じような制服を着た男子生徒がいた。

「何で俺の名前を？」

「そりゃ、俺と同時期にテレビに映ってたから。あ、俺は織斑一夏お前と同じ、珍しい男性IS操縦者だ」

「じゃあ、俺も自己紹介するよ。ユーグ・ラインブルグ。ユーグでいいぜ。織斑…というと、千冬さんのご家族か？」

「千冬姉を知ってるのか？」

「ああ、昔会った事があるし、学園に入れと言ってきたのもあの人だ」

「え…まさか千冬姉、ここの教師？」

ありゃ？千冬さんは秘密にしていたのか？

「そうだ。ま、何はともあれ、宜しくな、一夏」
右手を差し出す。

「おう、宜しく頼むぜ、ユーグ」

一夏が俺の右手を握った。

IS学園の友人第一号の誕生だ。
と、チャイムが鳴る。

「ここまでだな。ユーグ、また後でな」

そう言っで一夏は自分の席に帰って行った。

「全員揃ってますねー。それじゃSHR始めますよー」

教壇に立っているのは山田先生だった。このクラス、一年一組の副担任になったそうだ。

先生が何やら話をしているが、さらっと受け流す。
先生には悪いが、テンプレート通りの話はあるまじり聞かない主義なのだ。

途中、先生と目が合い、先生がにこつと笑いかけてくる。

可愛いなおい。ちょっとキュンときたわ。

返さないのも悪いので、軽くウインクをした。
先生はまたにこつと笑い、話を続けた。

「えっと、では、自己紹介をお願いします。出席番号順で」

変な緊張感にあたふたする先生。一番の奴早くしろよ、何か先生が
可哀想だろ。

そんなグダグダな状態でも、何とか自己紹介は進んでいく。

「じゃあ次、織斑一夏君」

一夏は何かボケている。考え事か？

「織斑君？織斑一夏君？」

「は、はいっ！」

あ、戻ってきた。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる
？ 怒ってるかな、ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己
紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君」

以下略。先生めっちゃテンパってるな。つか一夏、さっさと言えば
いいのに。

何とか先生を落ち着かせた一夏は、やっと自己紹介を始めた。

「えー…えっと、織斑一夏です。宜しくお願いします」

一夏は頭を上下させる。…もう少し何か言えよ、好物とか。

一夏も分かっているようで、少し間を置いた後、高らかに言い放った。

「……以上！」

俺を含む数人が床に転げ落ちた。間を空けてそれはねーよ。

その時千冬さ…織斑先生が入ってきて、一夏の頭を出席簿でスパァン！と叩いた。先生GJ。

一夏は後ろを見て、驚きの声を上げた。

「げえっ、織田信長！？」

バコンツ！さらにキツイ一撃。一瞬だが、出席簿からオーラが見えた。

「誰が尾張のうつけ者か、馬鹿者」

流石は織斑先生。ツツコミスキルもかなりのものである。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」
「い、いえっ、副担任ですから、これくらいはしないと……」

気のせいかどうかは知らないが、山田先生の目が熱っぽくなったよ
うな……あ、はにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは

聞け。いいな」

織斑先生の言い方は、一言で例えるなら軍人。ブリュンヒルデという称号のせいで、さらにそのイメージが恐ろしい物になる。が、直後にクラスから返ってきた反応は、それを上回るものだった。

「キヤーーーーー！ 千冬様！ 本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

自分の部屋からいきなりライブ会場に突っ込まれたような気分だ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

織斑先生。その目が表すように鬱陶しいのは俺もよく分かります。でもね、そういう人たちにそんな視線を送るのは

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をしてー！」

いわゆる逆効果という奴ですよ。

「で？ 挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は……」

バチコーン！ 今日この音を聞くのは三回目か。

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

お、バレた。姉弟ってバレた。

「じゃあ、男なのにISを使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

おい最後。代わったら代わったで地獄だと思っぞ。
そこでチャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

「はい」

……あ。クラス中で返事したの俺だけだ。あっちゃー、浮いたな、俺。

「いい返事だ。自己紹介をする権利をやるっ」

いらないます、そんな権利。

でもみんなが期待に満ちた目でこっちを見てるし……仕方ないか。
俺は立ち上がると、簡単に自己紹介をした。

「ユーグ・ラインブルグっています。好物はハヤシライスで趣味

はプログラミング。その他聞きたいことがあったら後ほど来てください。以上」

「よし、一時間目まで後十分程度ある。準備をしておけ」

そして俺は、一時間目が始まるまで質問のジェット・ストリーム・アタックを受けることになった。言うんじゃないかった、あんなことはあ…

宣戦布告(前書き)

最近眠いです……orz

宣戦布告

「ちょっと、よろしくて？」

休み時間、一夏と話していると、女の子が話しかけてきた。

白人特有の青い瞳。すらりと整ったスタイル。カールのかかった長い金髪。そして何よりも腰に手を当てたポーズが、高貴なオーラを出している。その高圧的な態度は、まさしく「今時」の女性であった。

「何か用か？」

「まあ、なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

嫌な感じのタイプだ。今のご時世でも、そうそういるもんじゃない。

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

俺たちが知らなかった事が相当気に入らないらしい。

「あなたには動物園の人気者扱いされる俺たちの気持ちは分からないだろ。学園中どこに行ってもじろじろ見られたり話しかけられたりするんじゃないよ、クラスメイトの名前なんて覚える暇がないよ」

「それより質問いいか？」

「ふん、下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

ここまで貴族気取りされると、堪忍袋の緒が切れそうだ。

「代表候補生って、何？」

聞き耳を立てていた女子数名が頭から地面に突っ込んだ。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの？」

すごい剣幕だった。まあ、仕方ないか。

「おう、知らん」

少しの間沈黙すると、セシリアはこめかみに人差し指を当ててぶつぶつ喋り出した。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのしら……」

「お姉さんが意図的にISに関する情報を見せなかったそうだから仕方ないかもな。で、代表候補生ってのは、国家代表IS操縦者っていう、国の顔とでも言うべきエリート候補。つか、ニュアンスで大体分かるだろうに」

「そう言われればそうだ」

一夏が納得したように首を縦に振る。

「そう！エリートなのですわー！」

落ち込んだ状態から復活したセシリアが、一夏の顔に向けて人差し指をビシッと差した。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

堪忍袋は、爆裂した。

「残念だけど、全く理解できない」

「何ですって？」

セシリアのこめかみがピクリと動く。

「あんたが入試主席だの貴族だの、そんなのはどうでもいいんだけど、何よりあんたの態度が気に入らん。普通の生徒ならスルーしてるけど、代表候補生、つまり国の顔のあんたがそんな態度なのが気に入らん」

冷静に、しかし怒りをこめて言葉を発した。

ちょうどそのタイミングでチャイムが鳴る。

「っ……！またあとで来ますわ！ 逃げないことよ！ よくって！」

それだけ言い残すと、セシリアは自分の席に戻っていった。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑先生のその一言で、この三時間目の最初はクラス代表を決める事になった。

大雑把に説明すると、生徒会の会議や委員会、そして今回のようなクラス対抗戦に出なければならぬ人身御供を決めようって事だ。任期は一年間。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺？」

「はい、ラインブルグ君がいいと思います！」

「私も同意見です！」

やはり俺もか。動物園の人気者は辛いねえ。

そんな心境で俺はつぶやいた。

「俺はこういう面倒事には首突っ込みたくないんですけどねえ」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

オウフ。これは俺と一夏のやりたくない選手権が始まるな。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

甲高い声がこだました。この声は……セシなんとかさんだな。……

何て名前だったっけ。セシ……セシ……セシル……違う。セシリ
ー……ダウト。セシリア……！これだこれだ。セシリアさんだ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

始まった。俺の理性はどこまで持ちこたえるだろうか。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ついに猿扱いかい。イギリスの代表候補生、そんな口の聞き方じゃ、自国のイメージも悪くなる一方だけ。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

一夏が耐えきれずに言葉を発した。やつちゃった顔の一夏に対し、セシリアの顔は真っ赤に染まっていく。

「あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
「侮辱もなにも、先に馬鹿にしたのはそっちの方だ。違うか？」

一夏の反撃。しかも綺麗に的を得ている。

「決闘ですわ!」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

おっと、戦争が始まったぞ。

「言うておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう? 何にせよちよūdいいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね!」

「ハンデはどのくらいつける?」

「あら、早速お願いかしら?」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

俺を除くクラス全員が大爆笑する。

「お、織斑君、それ本気で言うてるの?」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ?」

「本当に大昔の話か?」

俺はここで初めて口を開いた。みんなは「こいつ何言うてんの」「みたいな目で見ているが、どうでもいい。

「そこまで男を馬鹿にするのは何でだ? 『ISを使えないから』以外に理由はあるか? ……黙ってるってことは、それ以外の理由がないって事だな。一夏はISを使える。経験値の差こそあれ、使えるんだ。馬鹿にするんじゃないよ」

俺は半分キレていたんだろう。いつもの俺なら到底喋れないような事も平気で喋っていた。

「よし、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。ラインブルグは勝利した方と戦ってもらう。それでいいな」

「便宜上はクラス代表決定戦だから、他薦された俺も戦って事ですな」

「そういうことだ。三人はそれぞれ準備をしておくように。それでは授業を始める」

一夏と目が合う。

俺はアイコンタクトで「頑張れよ」と伝える。

一夏も小さく首を縦に振った。

俺は机の上の教科書を開き、授業に集中する事にした。

宣戦布告（後書き）

空気さんマジ簿 W

クラス代表決定戦

宣戦布告から、丁度一週間後の放課後。

決戦の日がやってきた。

一回戦、セシリア・オルコット vs . 織斑一夏。

アリーナ内では、戦闘開始から約三十分が経過、シールドエネルギーを三分の一くらいまで削られた一夏に対し、無傷のセシリアが圧倒的に有利だった。それもそのはず、代表候補生のセシリアの「ブルー・ティアーズ」が、手にした巨大な狙撃用レーザーライフル「スターライトmk3」と、機体名と同名の自立誘導兵器（以下ビット）4基による飽和攻撃を仕掛けるのに対し、IS初心者の一夏が駆る「白式」が、近接ブレード一本で戦っているのだ。三十分持ちこたえただけでも一夏は十二分に戦っているだろう。

俺はモニターを見ながら、セシリアの動きとビットの配置の仕方について考えてみた。

一夏は避けるのに必死で気付いてないみたいだが、あのビット、人間で言う死角、つまるところ後ろや真下にしか配置されない。また、ビットが動いている間、セシリアは微動だにしない。多分ビットの制御に集中しているからだろう。それに気付いてくれれば、恐らく一夏はセシリアを倒せる。

問題は他の武装だ。格闘戦用兵器は分からないが、ライフルとビットがレーザーを使う以上、エネルギー供給が間に合わなくなる事を見越して、実弾兵器が何かしら有るはずだ。それが何なのかは分からないが。

モニターでは、一夏がセシリアに突撃し、横から向かってきた一機のビットを近接ブレードで一闪、撃墜したところだ。その剣の動きは、多分剣道の物。

ブレードを上段に構え突撃する一夏。セシリアは後退すると、右手を振ってビットを二機動かす。その内の一機を一夏が切り落とす。間合いを詰めると、一夏はビット一機を切り、もう一機を回し蹴りで吹き飛ばし、セシリアに切りかかるうとした。その時、ブルー・ティアーズのスカートアーマーが外れて一夏に突撃する。ミサイル型であろうそれは、一夏を爆発に包み込んだ。

だが、まだ試合終了のアナウンスが聞こえない。万事休すではない。さっさと出て来い、一夏。

数秒後、煙が晴れ、中から形をガラツと変えた白式と一夏が出て来た。一次移行が終わったのだろう、その姿は中世の鎧のようだ。そして手にしたブレードは、一夏の姉、千冬さんがブリュンヒルデとなった時に使用した近接特化ブレード「雪片」に酷似した物だった。その刀身から発せられる光は、恐らく単一仕様「零落白夜」の物だろう。

それを見て、目つきの良くなった一夏は残りのビットを切り落とすと、セシリアに突撃、零落白夜の一撃を加えた。さらに返す刀でもう一度切り上げる。

そこでブザーが鳴った。

「試合終了、勝者、織斑一夏！」

アナウンスの音が、アリーナ中に響き渡った。

「次の試合は三十分後に行われる。ラインブルグ、準備は出来ているな？」

織斑先生からオープン・チャンネルでの連絡。

「大丈夫です。にしても一夏の奴、やってくれましたね」

「ISの性能に助けられただけだ」

「そうですね。あ、新装備のテストをしたいんですが、少し時間を頂けませんか？」

「分かった。十五分やろう」

「ありがとうございます」

束姉が送ってくれた新武装「ジム・ライフル」のテストをこれから行う。実弾兵器で一つのマガジンに二十発を装填。命中精度と貫通力に優れているアサルトライフルだ。

アリーナに飛び出すと、観客の歓声が耳に響く。軽く手を振ると、ターゲットを十機浮遊させ、テストを開始した。ちなみにこのターゲット、自立移動して攻撃までしてくる。

軌道予測で一機撃墜。その要領で全機撃墜。五秒と掛からなかった。使ってみての感想。いい装備だ、としか言えない。これならどんな奴でも叩けそう。あ、織斑先生は別。あれは人間じゃない。

ピットに戻って装備チェックを行っている、先の試合で負けたセシリアが話しかけてきた。

「ユーグさん、昨日までの無礼、申し訳ありませんでしたわ」

「いいよ別に。今回の事で分かっただろう。慢心がどれだけ危険かって事を。気付ければいい。間違いに気付いたら、それを認めて次に進むんだ。それが人間だからな」

「ふふっ、ユーグさんは優秀なポエマーですわね」

「茶化すなよ」

セシリアが柔らかく笑い、俺も笑った。

「次の試合、頑張ってくださいね。忠告しておきますけど、一夏さんは強いですわよ」

「そんな事は百も承知だ」

「では、わたくしはこれで」

そういうと、セシリアはピットから出て行った。

さあ、俺もそろそろ行かないと。

「ユーグ・ラインブルグ B・D・1号機 行きますす！」

俺はカタパルトに押し出され、再度アリーナへと舞い上がった。

「一夏、さっきはナイスファイトだった」

「千冬姉には大馬鹿者と罵られたけどな」

「ふっ、あの人なら言いかねんな」

やっぱり弟に対しては辛口な人。素直に褒めようぜ、お姉さん。

「ユーグ、それより時間だ。始めようか」

「手加減は無しで、な」

互いに距離を取り、身構える。

「両者、試合を開始してください」

右手にジム・ライフルを呼び出す。

一夏は瞬時加速で近付くと、手にしたブレード「雪片式型」で切りかかってくる。まだ零落白夜は発動していない。

左手でサーベルを握ると、ビーム刃でそれを受け止める。いつ零落白夜を発生させられるか分からないので、胸部バルカン砲を発射。

一夏はバルカンをもろに受け、距離を取った。

距離が取ればこっちのものだ。偏差射撃、マシンガンの牽制、ロケット・ランチャーと有線ミサイルなど、使える手を尽くして一夏のシールドエネルギーを削る。時折してくる瞬時加速も、1号機の機動力なら特に問題なく対処できる。つか、直線的過ぎる。それに武器の特性を分かってない。ほらそこ、マシンガンの弾幕に突っ込むんじゃない。

そんなこんなで、結局一夏が俺に一回切りかかる事は無く試合は決着した。俺完全勝利。ドヤ？

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一撃がりでない感じですね!」

朝のSHR。クラス的女子が盛り上がり、俺とセシリアが拍手をす

る中、一夏だけが取り残されたように一人ぽかんとしていた。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは、ユীগ君が辞退したからです」

びっくりしたような、恨めしいような視線を送ってくる一夏。

「こういう面倒事には首突っ込みたくないの」

「俺だってやりたくはねえよ」

「だが決定事項だ。なあ、みんな」

女子全員からの盛大な拍手。皆さん良くお分かりで。クラスの後ろに立っていた織斑先生が前に出てくる。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はい、とクラスのほぼ全員が返事をする。一夏はただ一人、頭を抱えて俯いていた。

クラス代表決定戦（後書き）

第さんがまだ一言も喋ってない……orz

とある授業にて（前書き）

やっと尊さんが登場です。でもほとんど喋らせてあげられないです。

父さん、僕どつすればいいんだ……！

とある授業にて

「ではこれよりESの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、ラインブルグ。試しに飛んでみせろ」
「はい」

四月下旬。俺は織斑先生の授業をいつも通り受けている。俺は1号機を展開、一夏とセシリアも展開を済ませた。

「よし、飛べ」

言われた後、ちゃちゃっと急上昇する。セシリアもほぼ同じ位の速度で急上昇する。一夏だけは出遅れ、上昇速度も遅かった。

「何をやっている。スペック上の出力では白式がトップだぞ」

織斑先生からお叱りを受ける一夏。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

セシリアが一夏にアドバイスをする。どういふ風の吹き回しか、セシリアは一夏の事を気に入ったらしく、放課後に何かと理由を付けて一夏のコーチを買って出ている。俺に対しての態度も変わり、

柔らかく笑うようになった。いい傾向だ。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときはふ

たりきりで

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい！」

急に回線から怒鳴り声が響いた。篝ちゃんの声だ。彼女も一夏に気があるみたいだ。

地上を見てみると、インカムを奪われた山田先生がおろおろしていた。ご愁傷様です。

「三人共、急下降と完全停止をやってみせる。目標は地表から十センチだ」

また難しいことを言う。まあやるしか無いだろう。

「了解です。それでは二人とも、お先に」

セシリアは急下降を開始、数秒後には完全停止までを成功させていた。

「じゃあ、俺も行こうかな」

俺も急下降を開始し、完全停止を成功させる。地表から約二センチの所で俺の足は止まっていた。

「あぶね、グラウンドに穴掘る所だった」

その時、俺の真横で衝撃音と共に砂煙が広がった。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けて
どうする」

「……すみません」

穴があつたら入りたい、とはこの事……もう穴にすっぽり入ってる
けど。なんち
て。

「ユীগさん、面白くありませんわよ」

さらっと読心術を使うセシリア。手厳しいな。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

篝ちゃんが怒っている。……昨日の練習は俺も横にいたが、

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずがーん、という具合だ』

とまあ、擬音ばかりで俺も一夏も全く理解できなかつた。これで教
えた気になる
のはちよつと。

「一夏、ユীগ、何か失礼なことを考えているだろう」

これのどこが失礼だ。ただ本当のことを考えていただけじゃないか。

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

うふふつと、楽しそうに微笑むセシリア。うん、やっぱり女性は笑顔の時間が一番美しい。

「ISを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても

、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか、この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

ゴゴゴゴゴゴ……という擬音が聞こえてきそうなほどオーラを放つ二人の女性。恋する乙女のバトルロワイヤルだ。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている」

二人の頭をぐいっと押しつけて、織斑先生が一夏の目の前に立つ。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ！」

「よし、でははじめる」

言われて一夏は展開を始める。右手を左手で握って、集中力を極限まで引き上げ、やっと右手の中に雪片式型を呼び出した。……実践じゃそんな暇ないと思うよ。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

きついお言葉。まあ、一週間練習して、やっと安定して展開できるようになったんだ、及第点はやってもいいじゃないか。

「ラインプルグ、手本を見せてやれ」

「了解」

直立不動のまま、右手にジム・ライフル、左手にマシンガンと同時に呼び出す。

ぶっちゃけこの程度、造作もなくできる。

「0.4秒。合格だ。近接用の武装を展開しろ」

「展開というよりは取り出すと言った方が正しいんですけどね」

言いながら脚部ラックからビーム・サーベルのグリップを取り出す。

「確かにそうだな。オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ……はっ、はいっ！」

篝ちゃんとの無言の戦いに集中していたセシリアはびくっと肩を震

わせると、慌
てて武装を展開しようとする……が。
手の中の光は、なかなかハッキリした姿とならない。……あー、普
段使わないか
らかな。

「……ああ、もうっ！ 『インターセプター』！」

ようやく、セシリアの手に自衛用と思われるショートブレードが展
開された。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうの
か？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから問題あり
ませんわ！」

「ほう、この間、IS初心者に易々と懐に入られたばかりか、その
まま切り刻まれ

たのはどこの誰だったかな？」

「あ、あれは、その……」

一夏との試合のことで弄られるセシリア。仕方ないね。

セシリアは一夏に抗議の視線を送ったが、一夏はそれを受け流した。
それを横目に見ながら、俺は装備の展開、収納を繰り返していた。

織斑一夏クラス代表就任パーティー（前書き）

今回は短めです。

織斑一夏クラス代表就任パーティー

というわけだ！ 織斑君クラス代表決定おめでとう！」
「おめでとー！」

その声を皮切りに、俺は音楽プレイヤーのスイッチを押した。同時に某ウルトラな巨大ヒーローの登場ファンファーレが鳴る。クラッカーも乱射され、その紙テープは一夏の頭の上に乗り上げていく。

その様子は、まさに『パーティー』と呼ぶに相応しかった。

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙が壁にかけてあり、これがパーティーなのだど理解させるには十分なものだ。

唯一問題なのは、祝われている人間が辟易とした顔をしていることくらいか。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君とユージュ・ラインブルグ君に特別インタビューをしてみましたー！」

オー！ と、一同が盛り上がる。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部长やってるの。はいこれ名刺」

そうやって俺と一夏に名刺を差し出す。うわあ、画数の多い字だな。

「ではではずばり織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

黛さんはそうやってボイスレコーダーを一夏の目の前に近づける。

「えーと、まあ、その……頑張ります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。まあいいわ、適当に捏造しておくからいいとして」

「ここにマスゴミの卵がいます！」

叫ばずにはいられなかった。新聞部副部長がそんなんでどうすんだよ。

「言ってくれるねえ。じゃあラインブルグ君、どうしてクラス代表を辞退したんですか？」

今度は俺にボイスレコーダーを向けてくる。

「面倒だったつてのが本心ですけど、こいつは伸びる奴です。実際セシリアを倒し、その後もグングンと成長している。クラス代表にしたのは、対IS戦の数をできるだけ多くしたい、ということもあるんです」

「なるほど。これなら捏造の必要も無いわね」

「だ〜か〜ら〜！」

きつと明日のマスゴミは貴女です、黛さん。（注：よい子のみんなは絶対に真似しないでね！）

「じゃあ専用機持ちの三人、写真撮るからちょっと並んで！。最初はセシリアさんと一夏君のツーショット行くよ」

「分かりました」

「わ、分かりましたわ」

若干恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうな声のセシリア。
そしてムスツとした顔の篝ちゃん。恋って複雑ですね。

「はい、チーズ」

パシャリとシャッター音が響き、二人のツーショット写真が、しっ
かりとネガに収められた。

その後、俺の写真も撮り終え、パーティーが終わったのは十時過ぎ。
女子のエネルギーについて、改めて考えさせられた俺と一夏であっ
た。

その後、ネガを自分のものにするためにセシリアが大枚をはたいた
のは、また別の話。

嵐を呼ぶ転校生……とのほほんさん

「ゆっちゃんおはよー。転校生の話聞いたあ？」

パーティー翌日の朝。クラスメイトの布仏本音さんが話しかけてきた。俺や一夏は『のほほんさん』と呼んでいるこの人は、いつもマイペース、のほほんとしており、正直よく分からない人。ちなみに『ゆっちゃん』とは俺のこと。一夏は『おりむー』。

「転校生？ この時期にか。家庭内の事情とかがあったのかな？」

「さあ。二組に入るらしいけど、ゆっちゃんはと思う？」

「別にー。別のクラスだからあんまり思うところは無いな」

一夏の席でも同じような話が展開しているらしく、セシリアや篝ちゃん、数人のクラスメイトが一夏の周りを囲んでいた。

「今のところ専用機持ちのいるクラスはここと四組だけ。これは来月のクラス対抗戦も余裕ね」

「その情報、古いよ」

教室の入り口から、声が響く。

そっちを見ると、ドアにもたれかかっている女の子がいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

その挑発的な姿は、お世辞にも似合っているとは言い難いものであった。

「鈴……？ お前、鈴か？」

どうやら一夏の知り合いらしい。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

横目で時計を見る。SHR開始時間まで、残り三十秒。

「のほほんさん、そろそろ戻ったほうがいいぞ」

「りょーかい」

自分の席に戻っていくのほほんさん。うわあ、すげえ遅い。視点を戻すと、さっきまで格好つけてた鈴音さんが、千冬さんの出席簿アタックの餌食になっていた。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴音さんがビビりながらドアから離れる。

「一夏、また後で来るから、逃げるんじゃないわよ！」

「二度も言わせるなよ？」

「は、はいっ……」

鈴音さんは逃げるように二組へ猛ダッシュ。

「……一夏、今のは誰だ？ 随分仲がいいようだったが」

「一夏さん？ あの方とはどういいう関係で？」

その他クラスメイトからも飛ぶ質問。君達、命が惜しく無いようだね。

スパンスパンスパンスパン！

……見えなかった。腕の動きが早すぎて目が追いつかなかった。

「席に着け、馬鹿共」

そんな事もあったが、SHR自体は無事に終了した。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、箒とセシリアから文句をぶつけられる一夏。

この二人、授業中ばーっとしていて山田先生から注意を何回も受け、千冬さんの出席簿アタックを何度か食らっていた。それは自己責任ですよ、お二人さん。

「とりあえず積もる話は食堂で。さ、行こうぜ」

そう言って、三人とのほんさんを連れて俺は学食に向かう。

「待ってたわよ、一夏！」

その声は、朝の転校生、鈴音さんのものだった。
手にはラーメンと割り箸。

「まあ、そこどいてくれ。通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。分かってるわよ」

言いながら横に移動する鈴音さん。

手にしたラーメンのスープがこぼれそうになる。

「のびるぞ」

「わ、分かってるわよ。大体、アンタを待ってたんでしようが！
何で早く来ないのよ！」

一夏が教室で弁当を広げていたらどうするつもりだったんだろう、
この人は。

気がつくのと、のほほんさんが場所を確保していたので、俺達はそこ
へ移動し、食事を開始した。

ちなみに俺はかけうどん、一夏は日替わりランチ（今日は鯖の塩焼
き）、篝ちゃんはきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、のほほん
さんはうどん（かき揚げ付）。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いつ代表
候補生に？」

「質問攻めしないでよ。アンタこそ、何ちゃっかりIS使ってるの
よ。ニュース見たときびっくりしたじゃない」

「一夏、お話中すまんが、こちらの方は？」

セシリアや篝ちゃんも聞きたいだろうから、俺が聞いておく。

「こいつは凰鈴音。セカンド幼馴染。あ、ファーストは篝な」

『一夏、爆弾を投下する』の巻。

「はじめまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

挨拶した二人の間で火花が散っている。ああ、恋してんだなあ。

「恋してんだねえ」

隣に座っているのはほんさんが耳打ちしてくる。

「そうだな、恋してんだな」

俺達は何食わぬ顔してうどんをすする。何食わぬ顔して飯を食う……。寒つ。

「ゆっちゃん、面白くないよお」

「うん、自分でもそう思った」

俺の周りには読心術の使い手が多い。

「ンンツ。鳳鈴音さん。わたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ。以後、お見知りおきを」

「うん、よろしくね」

そして飛び散る火花。ああ、恋だな。

そんな挨拶の皮を被った牽制合戦の中、俺はうどんを食べ終わった。

「いちそうさま」

「ゆっちんって食べるの早いねえ。早食い大会とか出たらどう?」
「それはパスで」

前に一回出たことがあるんだが、あれは……まあ、地獄だった。
食事は自分のペースで食べよう。お兄さんとの約束だぞ。

「じゃあ、これ分けてあげる」

のほんさんはそう言うと、自分のかき揚げを箸で半分ほど切って、そのまま俺の口元を持ってくる。……ん?

「のほんさん」

「なあに?」

「これは……いわゆる『あーん』ではなからうか」

「そうだよお。はい、『あーん』」

ずずいっと、口元に近付けられるかき揚げ。……周りの視線を釘付けにしており、めっちゃめっちゃ恥ずかしい。……ええい、ままよ!

ぱくつ。もぐもぐもぐ……じくん。

「どう?おいしかった?」

「正直なところ、こんな状況で味わう余裕は無い」

「ゆっちん照れてる〜。かわい〜」

「……………」

のほんさんから予想外の羞恥プレイを受けた俺は、午後の授業を
まともに受けることができず、千冬さんから出席簿アタックを何度
も受けたのであった……

鈴音さん、怒る

夜、俺は自室でマンガを読んでいた。
が、マンガの内容は全く頭に入っていない。

「うるさい……」

隣の一夏の部屋で、どうやら痴話喧嘩にでもなっているらしく、ぎやあぎやあと声が聞こえる。

……全く、何をやっているんだか。俺の読書タイムを邪魔するんじゃない。

文句のひとつも言いたくなって、ドアを開いた次の瞬間、

「へぶっ！」

女の子の声で、しかし女の子にあるまじき種類の声を上げながら、開いたドアに女の子がぶつかった。

「す、すまん！ 大丈夫か？」

「いたた……大丈夫よ、って、アンタ確か、一夏のクラスメイトの」

「ユーグ・ラインブルグって言うんだ。君は鳳鈴音さんだったな。

大丈夫か？」

「だから大丈夫だって。気にしないで」

「ああ。んで、一夏の奴、また何かやらかしたの？」

とりあえず聞いてみる。

「ええ。あいつ、あたしとした約束覚えてなかったのよ」

「……もし良かったら、その約束の内容を聞かせてもらえる？」

「へっ？ ま、まあいいけど……。あたしが料理上手になったら、その……あたしの作った酢豚を、毎日食べてくれるって……」

あー……。どうせ「食べてくれる」の部分が「奢ってくれる」とかに摩り替わってんだろうな。

「まあ、乙女の純情を踏みにじる奴は馬に踏まれて死ぬといいな」「全くよ。あの馬鹿、覚悟しておきなさいよね……」

一夏、本当に君はもげてしまうといいよ。

「じゃあ、今日はもう寝るね。ありがとね」

「ああ。おやすみ」

話を終えてドアを閉め、ベッドに寝転がる。
織斑一夏。罪深き男である。

次の日、寮の入り口にクラス対抗戦のトーナメント表が張り出された。

一回戦は一組対四組

一夏対鈴音さんだった。

次の日の放課後、俺は第三アリーナへ向かっていた。
アリーナでは一夏達が先に特訓を始めている。俺は書類等の件で山田先生に捕まり、遅れることになってしまったのだ。

と、アリーナ方面からすたすと歩く人が一人。

「お、鈴音さんじゃないか」

「あ、ラインブルグ」

「ユーグでいいぞ。長くて言いにくいだろ」

「そうね」

言葉に、隠し切れない怒りがにじみ出ている。

「また一夏か」

「ええ。あんの野郎……」

隠す必要が無くなったのか、目尻を吊り上げ、拳を握り締める鈴音さん。

「……後でフルボッコにしておく」

「あ、頼める？ なら息の根をギリギリ止めない程度にお願いね」

「お任せあれ」

俺はすたすたとアリーナまで歩き、アリーナ内へ入る。

中にはセシリア、箒ちゃん、そして一夏がいた。

「一夏、今日の特訓は一对多を主眼に置いたものを行う。セシリアと箒と俺がお前に集中攻撃するから、お前はそれを避け続ける。反撃は禁止だ」

「え、ちょ」

「分かりましたわ、ユーグさん」

「分かった、ユーグ」

二人は快く承諾してくれた。

「おいお前ら、殺す気か？」

「まあ一つだけ忠告がある」

「何だよ？」

「死ぬほど痛いぞ」

その言葉を皮切りに、一斉射撃が始まる。篝ちゃんの斬撃という名のトッピング付。

今日の特訓は、一夏が泡を吹いて倒れるまで続いた。

クラス対抗戦……のはずだった（前書き）

見てくださっている皆さん。

更新が遅くなって申し訳ございません。

期末テストで忙しかったんですorzへへっ……

クラス対抗戦……のはずだった

クラス対抗戦当日。

まだ日も昇っていない時間に、通信端末の着信音で俺は目を覚ました。

「んあ……何だ？」

Eメール受信と表示された端末を手に取って操作する。
そのメールは差出人不明だった。

メールを開いた次の瞬間、画面が突然プツリと暗転した。

「え……？　ちょ、これ……ウイルス？」

数秒後、画面にざらつきが生じ、だんだんと文字が浮かび上がっていく。

それを見た瞬間、俺の意識は完全に覚醒した。

才前八、大切ナ物ヲ失ウ

これは、誰かのいたずらか何かだろうか。
もしそうだとしたら、ちゃっちい話だが。

だがこの端末には、束姉作の対ウイルスプロテクターが仕掛けられ

ている。

天下の束姉でも跳ね除けられないウイルスなのだから、その可能性は限りなく薄い。

数秒後、また画面が暗転し、今度は画像が表示された。

その画像は

「学園の見取り図……？」

画像の中で、一カ所だけ赤く塗りつぶされた箇所がある。

それは、今回のクラス対抗戦の舞台となる、第二アリーナだった。

俺は織斑先生の部屋に向かった。

こんな時間に起こすのは気が引けるが、今はそんなことを気にしている場合では無いかもしれない。

部屋のドアをノックする。

「……こんな夜中に誰だ？」

織斑先生の声が聞こえた。

「ラインブルグです。ちょっと、妙な事が起こりましてね。少し時間を受けませんか？」

「……まあいいだろう。入れ」

カチャリと、静かな寮にドアの開く音が響いた。

「……と、言うわけです」

俺はさっき送られてきたメールを表示しながら説明した。

「話は分かった。が、このメールの差出人や目的が分からない以上、これを見せられたところで、私に今日の対抗戦をどうこうすることなどできません」

「んな事は分かってます。で、今日の対抗戦なんですけど、管制室で観戦させてもらってもいいですか？」

「どうしてだ」

「管制室なら全体を見渡しやすい。それに、客席と違って、アリーナ内へ直行できる通路があったでしょ？」

万が一のときは、俺がそこからアリーナへ入って戦うつもりだ。

「……分かった。許可しよう」

「ありがとうございます」

先生に向けて一礼し、部屋から出ようとする。

「ユーグ」

織斑先生に呼び止められた。何故か名前で呼ばれた。

「何ですか、先生」

「……無茶はするなよ」

「……了解です」

先生の気遣いに感謝しつつ、俺は自分の部屋へ戻った。

その日の昼間。第二アリーナの管制室に俺はいた。今朝のメールの件で許可は下りている。

手にしたノートパソコンの画面には、学園のリーダー施設から送られてくる情報が、リアルタイム更新で表示されている。

本来なら大人がすべき仕事だが、織斑先生が特別に許可をくれた。本当、織斑先生には頭が上がらない。

アリーナ内では、既に一夏と鈴音さんが試合を開始していた。室内の先生方の会話から察するに、一夏が劣勢のようだ。

その時、まるで今朝のメールの時のように、ノートパソコンの画面がプツリと暗転した。

「！ 織斑先生、これを見てください」

織斑先生と山田先生、他の先生方が俺のノートパソコンに視線を向ける。

数秒後、同じように画面に文字が浮かび上がってきた。

デスゲームノ始マリダ、ユーゲ

「デス……ゲーム？」

山田先生が呟く。

その瞬間、アリーナから爆音が聞こえた。

見ると、アリーナの遮断シールドが破壊されており、破損箇所の真下の地面から煙が立ち上っていた。

「対抗戦は中止。山田先生、アナウンスと織斑達への報告を。ラインブルグ、アリーナ内に突入して織斑達を救出しろ。教員はISを装着して待機しろ」

『了解！』

俺は1号機を展開、できる限りのスピードで通路を通り、アリーナ内へ突入した。

「一夏、鈴音さん、大丈夫か？」

「ユーグ？ 何でここに？」

「今はそんな事はどうでもいい。脱出するぞ」

「どうやら、そういうわけには行かないみたいよ」

鈴音さんの言葉とほぼ同タイミングで、バイザーに警告が表示される。

アリーナ中央にISを確認。機種照合……『ゴーレム？』

そこにいたのは、束姉作、世界初の実用型無人IS『ゴーレム？』だった。

そうか。今朝のメール、そしてさっきのメッセージは、東姉の仕業だったのか。

道理でプロテクターを破ってくるわけだ。

俺はこの事を伝える為、織斑先生にプライベート・チャンネルで通信を繋いだ。

「織斑先生、アリーナ内にISが侵入。情報を送ります」

「了解した」

数秒後、通信が帰ってくる。

「ラインブルグ、その二人と一緒に対処に当たれ。アリーナのシステムがハッキングされ、増援を送ることが不可能となった。現在システムクラックを実行しており、それが終わり次第援軍を送る。それまで耐えるんだ」

「無茶を言ってくれますね。まあ、仕方がないですね」

通信を切り、一夏と鈴音さんに話しかける。

「二人とも、このISは俺たちで仕留めるぞ。ここで止めないと、死人が出る可能性もあるしな」

「分かった!」

「ユーグ、援軍は来ないの?」

「まだ無理だ。奴がアリーナのシステムをハッキングしている。システムクラック中らしいが、悠長に待っている時間はないな」

煙が晴れ、中からゴーレムの歪な身体が露になった。

「俺が援護するから、二人は前衛を頼む」

「よっしゃー!」

「分かったわ！」

俺たちは、とんでもない形で異形の怪物と戦う羽目になった。
束姉には説教が必要だ。

その説教をするためにも、ここを乗り切って見せないとな。

クラス対抗戦……のはずだった（後書き）

中途半端な終わり方ですみませんorz

感想お待ちしております。

決着

「でやあああつ！」

「おりやああつ！」

一夏と鈴音さんの斬撃がゴーレム？を襲う。

「当たれ当たれ！」

その斬撃の隙間を埋める形で、俺の射撃がゴーレム？を襲う。

それらの攻撃のほぼすべてを、ゴーレム？は回避して見せた。巨体に見合わぬ、高い機動力によって。

「なんなのよあいつ……滅茶苦茶速いじゃない！」

「攻撃が当たらないんじゃない、こっちがジリ貧だな……くそっ！」

距離を取りつつ、二人が口にした。

「二人とも、残りエネルギーは？」

「零落白夜一回分って所だ！」

「130位。さて、どうするか……」

「……なあ、あいつの動きってやけに機械じみてないか？」

「どういうことよ？」

どうやら一夏、奴が無人機だということに気付いたらしい。

俺は知らないふりをして、一夏の言葉を引き継いだ。

「そついえば、こちらが会話している時は全く手出ししてこないよ

な。まるで俺達から情報を取ろうとしているみたいに」

「だとしたら、勝機はある」

「たとえ全力の零落白夜を心置きなく使えるとはいえ、こっちの攻撃はちつとも当たらないのに、どうする気よ？」

「鈴、こっちが合図したら、衝撃砲を最大出力でぶっ放してくれ。」

「ユーグは俺が失敗した時のバックアップを頼む」

「……分かったわ。ちゃんと仕留めなさいよ！」

「了解した。骨は拾ってやるよ」

「この状況だと冗談にならないぞ、それ」

その時、アリーナのスピーカーから大音量で音声が響いた。

「一夏あつ！ 男なら、男なら、その程度の敵に勝てないでどうする！」

見ると、実況席で、篝ちゃんがマイクを握っていた。って、まずい！ ゴーレム？の注意が篝ちゃんに向いた！

「一夏、すぐに決めるぞ！ 鈴音さん、衝撃砲発射準備！」

「ええ！」

一夏は雪片式型を構えると、衝撃砲の射線上に移動した。

「ちょ、一夏、どいてー！」

「鈴、撃てー！」

「ああもう！ 知らないわよー！」

鈴音さんは、もう半ばヤケクソといった感じで衝撃砲を発射した。

さて、恐らく一夏が考えていることはこうだろう。

衝撃砲のエネルギーを取り込み、瞬時加速用のエネルギーに足してやることで、ゴーレム？の反応速度を超えるスピードの瞬時加速を繰り出す。

だが、衝撃砲を背に受けた時点で絶対防御が発動し、無駄に終わるはずだ。

だとしても、もし、絶対防御をカットできたなら。

一夏は衝撃砲を背に受けると、さっきとは比べ物にならないスピードで突進した。成功だ。

「おおおおっ！」

一夏がゴーレム？の右腕を切断する。

そのまま本体に斬撃を繰り出そうとする一夏は、ゴーレム？の左手に吹き飛ばされた。

俺はすかさずビーム・サーベルを抜刀。同時にEXAMシステムを発動させると、ゴーレム？目掛けて強化されたサーベルを投擲した。サーベルはちょうど左腕の間接部に当たり、溶断する。

「チエストオオオオオッ！」

即座に突っ込んで、一閃。
四肢をもがれ、攻撃能力のすべてを失ったゴーレム？は倒れこみ、沈黙した。

「ユーグ、助かった」

倒れこんだまま一夏が言う。

「当然のことをしたまでだ」

警告！ ゴーレム？再起動。高エネルギーの収束を確認

煙の向こうから光が見えた。

「お任せを！」

瞬間、複数の青い光がゴーレム？を貫いた。

「セシリアか！ ナイスタイミング！」

「ちょうどシステムクラックが終了しましたので」

不敵な笑みをこちらに向けると、未だ動こうとするゴーレム？に追いつきを掛ける。

「狙い打ちますわ！」

スターライトMk-3の光がゴーレムを打ち抜き、完全に沈黙させた。

長い長い事情聴取を終え、俺はへトへトの状態で自室のベッドにばかりと倒れこんだ。

こういう時はすぐに眠りにつきたいものだが、俺はこういう時に限って眠れないのだ。

「……腹減ったな」

そういえば、まだご飯を食べていなかった。

俺は起き上がると、部屋の簡易キッチンで適当に一品作ることにした。

「……材料が無い」

仕方ないので、今日は寮の食堂を利用することにした。

「後一時間か……」

来るのが早すぎたようだ。

自室に戻り、時間まで待つことにした。

「……寝過ぎした」

気が付くと、食堂の利用時間ギリギリになっていた。

俺は急いで食堂に向かった。

「量が多いな」

恐らく残飯を出来るだけ増やしたくないのだろう、俺の頼んだうどんは普段の五割増の量だった。
そこまで食欲も無かったが、せっかくタダで増やしてくれたのだ。
それを無駄には出来ない。全部食べることにした。

「どちらさんですか？」

俺の部屋に、知らない誰かがいた。

「僕はシャルル・デュノア。明日付けでこの学園に転入することになったんだ。これからよろしくね」

『シャルル』。確か、男性名のはずだ。とすると……

「お前、男か」

「うん、そうだよ」

「中世的な顔立ちしてるから、女かと思ったよ」

「よく言われるよ」

「ふうん。で、何でこの部屋にいる？」

「そういう部屋割りになったみたいだよ」

「そうか……」

と、いうわけで、この学園にまた一人、男（またの名を「争いの火種」）が増えた。

決着（後書き）

やっぱり文才ないなあ。へへっ、やっぱり俺って……

感想お待ちしております。

転校生はブロンド貴公子！前編

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。色々和不慣れなことも多いかと思いますが、どうぞよろしくお願いします」

翌日のホームルーム。昨日俺の部屋に現れた『あいつ』が、教壇の前で挨拶をしていた。

「お……男？」

「はい、ここに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国から転入を」

そこまでシャルルが喋った瞬間、

『きゃああああああああっ！』

クラス中から黄色いソニックウェーブが発せられた。

「二人目の男子！」

「何か貴公子みたい！」

「織斑君やラインブルグ君と違って、守ってあげたくなるタイプね！」

「今度の薄い本も、ネタに困ることはなさそうね！」

腐ったコメントはスルー推奨です。

「あー、騒ぐな、静かにしろ。織斑、ラインブルグ、デュノアの面

倒を見てやれ

「はい」

「了解です」

「では、ホームルームを終了する。一時間目は第一グラウンドで実習だ、遅れるなよ。解散！」

織斑先生がホームルームを締めくくるとともに、シャルルと一夏がこちらに近づいてくる。

「君が織斑一夏君？ 僕は」

「話は後だ、すぐにアリーナの更衣室に向かうぞ」

シャルルの言葉を遮ると、俺はISスーツの入った手提げ袋を片手に立ち上がった。

「女子が着替え始めるからな」

俺の言葉に理由を付け加える一夏。

俺たち三人はさっさと教室から出た。

「俺達男子は実習のたび、アリーナの更衣室で着替えなきゃならん。覚えておけ」

「うん。改めて自己紹介するね。僕は」

「あーっ！ ウルフィーよりH.Q.へ！ 噂の転校生と織斑君、ラインブルグ君を発見！」

「者ども、出会え、出会え！」

うわぁ、まずい。これに捕まったら最後、織斑先生の出席簿アタックが待っている。

「一夏、シャルル、突破するぞ！」

「おう！」

「え、ちよ

状況が理解できてないシャルルの手を引っ張り、俺達は群がる女子の軍勢を振り切るために走った。

「目標、B2通路を通過。そのまま第二アリーナへ向かいます！」

「アリーナ更衣室前に人員を配置！ 捕まえなさい！」

通信筒抜けですよ、先頭のお嬢さん。

そしてその言葉通り、更衣室前には女子数名が待機していた。

『ここから先へは行かせないわよ！』

おお、なんと威勢のいいことで。ならば奥の手だ。

俺は織斑先生に電話を掛けた。

『もしもし』

「先生、転校生目当ての女子が更衣室を塞いでおり、中に入れません」

『はぁ……分かった。何とかしよう』

それから約三十秒後、俺達が彼女らとにらみ合いの体制になった瞬間、更衣室の

ドアが開き、世界最強の人間が姿を現した。

『お、織斑先生……』

「貴様ら、こんな場所で何をやっている。一時間目まで後三分を切っているぞ。」

遅れたら第一グラウンド三十周だぞ」

『す、すみませんでした！』

さっきの威勢がどこへやら。蜘蛛の子を散らすように彼女らは逃げていった。

「お前達も遅れるなよ。遅れたら……分かってるな？」

「分かってます。では、また後で」

「ああ」

更衣室から出て行く織斑先生。

「……ユーグって、千冬姉と仲いいのな」

「普通にしてるだけさ」

「ふーん。あ、俺は織斑一夏。一夏でいいぜ」

「ユーグ・ラインブルグだ。ま、よろしくな、シャルル」

「うん、よろしくね、二人とも」

「さて、時間もなし。さっさと着替えちまおうか」

言いながら、俺は上着を一息に脱ぐ。一夏も同様。

「わわっ！」

それと同時に可愛らしい声を上げるシャルル。

「どうした？ 何か忘れ物でもしたか？ って、着替えないのか？」
「う、うんっ！ 着替えるよ、うん。でも、あっち向いてて、ね？」

一夏の問いに、顔を真っ赤にして答えるシャルル。

「あ、ああ……」

それから少しの沈黙の後、俺はあることに気付いて口を開いた。

「……シャルル、こっち見てるのはどうしてさ？」

「み、見てない！ 別に見てないよー！」

後ろで焦るシャルルの顔が容易に想像できる。

「うーん、それにしてもこれ、着るときに裸つてのが何か着づらいんだよねあ。

引っかって」

「ひ、引っかって？」

「おっ」

一夏の言葉に後ろで焦るシャルルの顔が以下略。まるで女の子だ。

シャルル、俺、一夏の順で着替え終わり、一緒にグラウンドまで小走りで行かう

。幸いこの更衣室とグラウンドまでは一分と掛からない。

ここで俺は、気になったことを口にした。

「シャルルのISSスーツって、デュノア社のフランクスマイみたいな感じだな」

「ベースはフランクスマイだけど、ほとんどフルオーダー品だね」

「デュノア？ デュノアってどこかで聞いたような……」

一夏が口を開く。シャルルはそれに、予想通りの解答をした。

「僕の家だよ。父が社長をしてるんだ。一応はフランスで一番大きなISSの企業だ
と思う」

「ああ、どおりで」

「えっ？」

「シャルルって、何というか、いいところの育ちというか、そんな感じに見えるが
がらなあ。やっぱりか」

それを聞いたシャルルの顔は、少しだけ曇っていた。

「それより一夏の方がすごいよ。あのブリュンヒルデの弟でしょ？」

「ハハハ、こやつめ！」

……

ちよつと言っていることがわからないですね。

「一夏、言葉選びには細心の注意を払うように」

「す、すまん」

そんなこともあったが、俺たちは無事に一時間目に間に合ったのであった。

転校生はフロンド貴公子！後編（前書き）

更新サボってしまって申し訳ありません。

夏休みの宿題が終わらなかったもので……orz

転校生はブロンド貴公子！後編

昼休み。超美形の転校生シャルルを目当てに、一年一組には大量の女子たちが詰めかけていた。

しかしそこは貴公子のシャルル。詰め掛けていた女子一人一人に、まるでヴェルサイユが舞台の某漫画に出てきそうな華麗な対応をしていた。

これ、あまりにも効果が高すぎたのか、数十名ほど鼻血噴いて倒れた奴らが居たらしい。……まあ、同性の俺から見てもかつこいと思っただけだったから、ある意味仕方ないのかもしれない。

そして今。俺は、一夏とそのラヴァーズ三人、シャルルの計五人で、屋上にて昼食を取っていた。

ちなみに、何故皆で食ってるかというと、

箒ちゃんが一夏を誘う

一夏が承諾

一夏「皆で食べた方がいいよな」

一夏、他のメンバーを誘う

と言うこと。わざわざ一夏の弁当まで作ってきた箒ちゃんドンマイ。そして一夏は一度死ぬといいと思う。

余談だが、シャルルの弁当は俺の手作りだ。材料が余り無かったので、食堂の方に我俣を言っただけで材料を分けてもらったのだ。

「はい一夏、アンタの分」

鈴音さんがタツパーを一夏に放り投げる。

「お、酢豚か！」

「そ。今朝作ったの。アンタ、前に食べたいって言ってたでしょ」

「コホン。一夏さん、わたくし今朝は随分早く目が覚めまして、これを作ってきましたの。よろしければどうぞ」

セシリアは言いながらバスケットを開き、中のサンドイッチを見せる。

「あ、後で頂くよ……」

引きつった笑みの一夏。

……この際はつきり言うつと、セシリアの料理はまずい。壊滅的にまずい。名家のお嬢様として何不自由なく育ったのだろう、彼女は料理の事が全くと言っていいほど分かっていないのだ。それは仕方のないことだろう。

だが、それを差し引いても、シチューにバニラエッセンスや生クリームをぶち込むような料理センスというのは、余りにも非常識ではないだろうか。

因みに本人曰く「本と同じになっただけいいのではないかしら？」とのこと。いや、お前のは見た目だけだから。この女、フライパンや鍋をキャンバスか何かと勘違いしているのではないだろうか。

「ヨーグ、僕、お邪魔だったかな……？」

「確かにこの面子じゃ、何か可哀相だな……。一夏、シャルルと二人で話したい。すまんが外すぞ」

「あ、ああ」

離れる時、一応三人に親指を立てておく。三人とも、会釈を返してくれた。

俺達は、ちよつと離れた所のテーブルまで移動し、そこで昼食を取ることにした。

「にしても、ヨーグの料理って結構美味しいね。家庭的でいい主夫になるんじゃない？」

「姉が半ニート状態だから、ほぼ毎日食事作ってたんだよ」

半ニート……間違っちゃいないだろうが、（世界を震撼させるような）趣味にかける労力は半端無いからなあ。それで稼いでるんだからニートとは言えんか。

その後も一夏の受難を遠目に見つつ、俺たちはゆっくりとランチタイムを楽しんだのだった。

夜。食堂で沢山の生徒の質問攻めを受けながら晩御飯を食べた俺とシャルルは、部屋に戻って緑茶に舌鼓を打っていた。

「シャルル、シャワー先に入っていていいか？」

「うん。基本的に僕が後でいいから、ゆっくり入っていていいよ」

「何かすまんな」

「いえいえ」

本当に貴公子と呼ぶにふさわしい立ち振る舞いのシャルル。が、俺は彼の表情に、若干の影を感じていた。まるで世界に色を見いだせないかのような影を。

さああ、と音を立てながら、雨のように体を包むシャワー。

「やってみるか……！」

俺はシャルルの真実を見いだす為に、とあることを考えつき、実行することに決めたのだった。

別に初めてではないハッキング

シャワールームにて、お湯の降り注ぐ中、俺はISを部分起動した。フランス政府ならびにデュノア社へ、ハッキングを掛けるためだ。

通常回線からのハッキングではバれてしまう可能性があるため、束姉のオーバーテクノロジーを借りて、彼女特製の特殊回線から仕掛けることにした。もちろん、ISを起動している事を感じつかれないよう、ジャミングの類も完璧だ。

(ファイアウォール突破、次の関門は……あれ？ 案外簡単じゃないか)

数分後、バイザーには大量のデータが表示されていた。

検索機能で、そのデータの中からシャルルに関することだけを取捨選択

『シャルル・デュノア』検索結果：0件

(どういうことだ?)

一般人ならともかく、彼は代表候補生のはずだ。そのデータが存在しないなどということは、ありえない。

(存在しない人間……そんなはずは無い。つまり)

偽名、という可能性だ。

とりあえず、俺は名前の文字を1文字ずつ減らして、ワードを分けて検索してみた。

『シャル』 『デュノア』 検索結果：1件

(早っ)

一回目から早くもビンゴの予感である。

検索結果には、『シャルロット・デュノア』という女性。デュノア社の非公式テストパイロット。

そのデータを開く。

(ありゃ、顔写真まんまシャルルじゃん)

驚くことに、そこにはシャルルと瓜二つの女性が居た。また、専用機もシャルルと同じ『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』である。

だが、これでシャルル＝シャルロットとするのはまだ早い。双子という可能性もあるし、ただ単に別人というセンもある。

そこで、デュノア社のデータからシャルロットの関連データを根こそぎ抜き出し

「ユーグ、まだ?」

まずい。シャルルが話しかけてきた。

「ああ、すまんがまだだ。後二十分待つてくれ」

「いいよ。ちよつどいい番組やってるから、ごゆっくりどうぞ」

セーフ。しかし、自分の口からタイムリミットを口走ってしまった。彼がテレビを見ているとはいえ、すぐに仕上げなければ。

(男性IS操縦者『シャルル・デュノア』としてIS学園に転入し、『織斑一夏』、『ユーグ・ラインブルグ』両名ならびに専用機のデータを手せよ か……。彼女はそれを望んでいなかったんだろうな)

この命令書により、シャルル＝シャルロットの図式は成立することになった。

他にも、シャルル シャルロットが社長の愛人の子と言う事、社長と戸籍上血縁が無い事などが分かった。生みの親である愛人さんは既に他界していた。

(辛い境遇だったんだな。ここで真実をバラしたら、彼女を傷付けることになるな)

なら、しばらく泳がせて様子を見たほうがいいか。

俺はISを解除、シャワーを止めるとシャワールームを出た。

「遅くなった。すまん」

「いいよ。ちょうど終わったところだし。じゃあ、僕も入ってくるね」

「あ、さっきボディークリーム切らしたんだ。ちょっと待っていてくれ」

洗面所の棚の中から、真新しいボトルを取り出す。

「これだ。使ってくれ」

「ありがとう」

……女の子と分かっているからなのだろうか。彼女の笑顔がすごく可愛く見える。

つて、イカンイカン。しっかりせい。

「どうしたの？何か赤いよ？」

「長湯でのぼせたんだろうな」

お風呂ならともかく、シャワーでのぼせるなんて事はそうそう聞いたことは無いがな。

「そう。無理はしないで、早めに寝たほうがいいよ」

「分かった。ありがとう」

「いえいえ」

俺はベッドに入り、意識を沈めようと目をつぶる。

睡魔は、意外と早めに訪れた。

転校生は銀色軍人……

翌日。

「きよ、今日も、新しいお友達が増えます。ドイツの代表候補生の、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

明らかに疲弊しきっている山田先生の作り笑いから、SHRは始まった。

「この時期に転校生が何人も来るなんて……」

「ねえ……やっぱり変じゃない？」

さすがに二日連続の転校生、という事に違和感を覚えたのか、クラス的女子もざわめいている。

「ボーデヴィツヒさん、こっちへ」

山田先生の声の後、一人の女の子が教壇へ立つ。

銀のロングヘアと、右目の眼帯が目を引く彼女は、小さい背丈ながら、近寄りがたい程の威圧感を醸し出している。

「挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生の言葉に、彼女はビシッと軍隊式の敬礼をした。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

そのまま、数秒の沈黙。

一夏の自己紹介の時のような、『お前もっと何か喋れよ』といった感じの沈黙であった。

「あ、あの……以上、ですか？」

沈黙に耐えかねたらしい山田先生が問いかけると、

「以上だ」

きっぱりと言い放った。

山田先生、轟沈である。

と、彼女
を捉えた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

は、視界に一夏

途端に彼女から放たれる敵意に、一夏はぼかんとしている。

「貴様が……！」

ばしんっ！

……一夏が、何故かビンタされた。

「……っ！ 何だよ一体！」

「……認めない……貴様があの人の弟だなど、認めるものか」

それだけ言い残すと、ラウラは指定された席へすたすたと歩いていった。

それからというものの、一夏はその後の授業を、ラウラからの敵意を感じながら過ごす羽目になっていた。

彼には、そんな事を言われる筋合いは無いと思うのだが……。

最後の時間が終了し、SHRが終了した後、俺は一夏の所へ行ってみた。

ちなみにラウラは終了と共に教室から出て行ってしまったため、ここには居ない。

「一夏、大丈夫か？」

「これは……想像以上にきつい……」

ラウラからの敵意が負担となっていたのだろう、一夏はぐでーっと机に突っ伏していた。

「疲れただろ、飲み物奢ってやるから、自販機まで歩くぞ。歩いたら、ある程度元気も出る」

何を根拠に、と思う人もいるだろうが、ソースは俺だ。

精神的に疲れた時は、少しその辺を散歩がてら歩くのが結構効果的なのだ。

「ああ、サンキューな」

重い腰を上げる、という表現がしっくりくる感じで立ち上がった一夏と共に、俺は自販機まで向かった。

「……何故こんな所で教師など！」

「やれやれ……」

一夏と共に自販機でジュースを買った後、置いてきた荷物を取りに教室まで戻ろうとしている時の事。曲がり角の向こうから聞き覚えのある声が聞こえた。一方はラウラ、もう一方は織斑先生だった。一夏に目配せをし、俺達は角に隠れてその声を聞いた。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

携帯端末（勿論マナーモード）を取り出して一夏に見せ、擬似的に会話をする。

……織斑先生の以前の仕事って何？

ドイツ軍の教官。ラウラは軍人で間違いないと思う

何で先生が軍の教官してたんだ？

そこは聞かないでくれ

すまん……

以上、擬似的会話終了。

「お願いです、教官！ 我がドイツで再びご指導を！ ここではあなたの能力は半分も生かされません！」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません！ 意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている。そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど……」

「……そこまでしておけよ、小娘」

「っ……！」

織斑先生の声がいきなりドスの効いた物に変わる。流石のラウラも、織斑先生のこれには勝てないのか。現役軍人を黙らせる人間とか、そうそういるもんじゃないだろうに。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

震える声。恐怖と不安の入り混じった声がラウラから漏れる。

「話は済んだか？ これから私は職員会議だ。用が無いのなら、さっさと行け」

ラウラはすたすたと歩いていったようだった。

「……で、その男子生徒二名。盗み聞きか？ 異常性癖は感心しないぞ」

まあ、バレてるよな。こればかりは仕方ない。

「教室まで戻りたいのに、その道筋でこんな緊迫した話をやってるんですから、いつ出て行っていいか分からなくなるんですよ」
「にしても、異常性癖って言い過ぎだよ、千冬姉」

スパアン！

「……すみませんでした」
「分かれば宜しい」

いつもの事ながら、この出席簿が何で出来ているのかが非常に気になる所である。

「知りたいのか？」
「知らない方が幸せみたいですな」

地味に思考を読む先生に、俺は軽く畏怖の念すら抱いた。

「忘れてはいないと思うが、今度の学年別トーナメントに向けての練習は怠るなよ」

「……正直な所、忘れてました。気をつけます」
「宜しい。では、また明日な」

織斑先生は職員室の方へ歩いていった。

「さ、俺達も寮に戻るぞ、一夏」
「ああ」

転校生は銀色軍人……（後書き）

10/2：後半部分を入力し忘れたまま投稿してしまっていたので修正。

10/22：サブタイトルを修正。

一夏に力を！ 脱初心者レクチャー

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 俺は一応分かっているつもりだったんだけどなあ……」

そのやりとりを起点に、俺達は映像とデータを交えて話し合った。事の始まりは今日の昼、シャルロットが転入してから6日目の事だった。

土曜日は午前中にIS理論学習、午後は自由時間になっている。その自由時間はアリーナが全解放されているため、練習に使われる事が多い。

俺とシャルロットは半日の授業を普段通りに受けた後、一夏の申し出でIS操縦のレクチャーをする事になった。

最初にシャルロットと一夏に軽く手合わせをしてもらい、その映像とデータを収集し、一夏の癖や戦闘スタイルを加味してアドバイスをすることにした。

「うーん、ただ知識として知っているってだけで感じてさ。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「確かに。『瞬時加速』も読まれてたしなあ……」

「銃は剣よりも強し。勝ちたいなら、相手より深く射撃武器の事に精通する位じゃないと無理だ。それに、お前の瞬時加速って直線的だから、軽く置き撃ちするだけで取れるんだよ」

「お、置き撃ち？」

……しまった。ついゲーム用語を使ってしまった。

「軌道予測とか、偏差射撃の類かな？」

そこへシャルロットが助け舟を出してくれた。

「そうそう。分かり難くてすまん」

「いや、少なくともこの間までの自称コーチ様達よりはマシだよ」

ここで言う自称コーチ様達とは、篝ちゃんに鈴音さん、セシリアの事だ。

『ごう、ズバツとやってから、シュンツ、ババツ、ドゴンツ！とまあこんな感じだ』

『さつき見せたのでなんとなくわかるでしょ、感覚よ感覚。……分らない？ アンタの目は節穴なの？』

『防御は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転。これは基本的な動作で、実際にはコンマレベルのコントロールもありますわよ』

これがIS初心者に対する非情な仕打ちである。

それに、本人としては、ISスーツの露出度も問題だそうさ。俺だっつてそうさ。

「そついえば、お前の白式って拡張領域が全く空いてないから、後付武装は無理だったんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、そうらしい」

「多分それって、ワンオフ・アビリティーの方に容量を割りちゃってるからじゃないかなあ」

「ワンオフ・アビリティー……ってなんだっけ？」

「言葉通りの意味さ。ISと操縦者の相性が最高になった時に、I

Sが自然に発現させる特殊能力。まあ、お前の白式は一次移行の段階で発現してるなんていうびっくり現象が起こってるがな」

そう。ワンオフ・アビリティーは、今まで確認されているその全てが二次移行したISに発現しており、白式の『零落白夜』のように、たかだか30分程度の操縦で終了するフォーマットとフィッティングのみで発現するなどと言うことは起きないはずだった。

しかも何の因縁か、それは（使用する武装が雪片系列である事も含め）かつて織斑先生の愛機であった『暮桜』の物と同一だったのだ。こういう事の裏には、確実に束姉がいると見ていいだろうが。

一夏とシャルロットはその事はひとまず置いておき、最初に「銃」を知る為にシャルロットの愛用アサルトライフル『ヴェント』を使用して射撃訓練に入った。

俺は引き続き、データ収集と回覧に徹していた。

そして一夏が弾薬を1マガジン分使い切った時に、異変は訪れる。

「ねえ、ちよつとアレ……」

「嘘……ドイツの第三世代型だ」

「まだトリアル段階だって聞いてたけど……」

アリーナ内にざわめきが走る。俺達はそれに従うように、その方向に視線を移した。

視線の先、アリーナのゲート付近に、漆黒のISを装着したラウラ・ポーデヴィツヒがいた。

彼女は俺達……と言うよりは一夏のみだろつが……を視界に捉えると、オープン・チャンネルで一夏に話しかけた。

「おい」

「……なんだよ」

一夏がとりあえずの返事をする、ラウラはゆっくりとこちらに近付いてくる。

一応、何時でも武装を呼び出せるように構えておく。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

……一夏とラウラの間には、何らかの因縁があるようだ。おそらくは先日、ラウラと織斑先生が話しているのに遭遇した際、一夏が話すのを渋った事だろう。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し得た事は容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

織斑先生は第二回モンド・グロツソ決勝戦の直前に棄権、優勝を逃している。ラウラの言葉通りに受け取るならば、この原因の一端は一夏、と言う事になる。

「また今度な」

「ならば　　戦わざるを得ないようにしてやる！」

ラウラのISが戦闘状態へとシフト。瞬間、肩部のレールキャノンが火を噴いた。

刹那、俺は一夏の前に割り込み、シールドでその砲弾をやり過ごす。ドスンッ、と後ろから着弾音が聞こえた。

俺はマシンガンを、シャルロットはアサルトカノン『ガルド』を構え、それぞれラウラに向ける。

「こんな密集地帯でいきなりそんなバカでかい物を発砲するとはね。随分沸点が低いように見えるが？」

「ふん。そんな重そうな防御型の機体で私の前に立ちふさがろうとはな」

「外見で敵の力量を判断するのは、戦場ではやめておいた方がいいぜ、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐」

「！」

実は、俺はシャルロットの時と同じやり方で、奴のデータを収集させてもらっていた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍少佐。特殊部隊『黒ウサギ隊』隊長。そしてまたの名を『遺伝子強化試験体C-0037』という。人工的に合成された遺伝子をその体に抱え、鉄の子宮から生まれた「クローン人間」という奴だったのだ。

『その生徒、何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え』！

アリーナに突然反響する先生の声。騒ぎを聞きつけて来たのだろう。

「……今日は退こう」

それだけ言い残すと、ラウラはISを解除。ゲートへと消えていった。

「管制室、こちら1年1組のユーク・ラインブルグです。相手方が

突然発砲してきたので、ああいう形になりました」

『了解。後程あなたには事情聴取を行います。30分後、職員室へ出頭しなさい』

「分かりました」

とりあえずの弁解を済ませておき、俺は後ろの一夏に声をかけた。

「大丈夫か？」

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。二人とも助かったよ」

シャルロットに先ほどまでの緊張感は無く、いつもの人懐っこい感じの表情になっている。

「じゃあ、僕達も戻ろっか。どのみちアリーナの閉館時間は近いしね」

「そうだな。あ、銃サンキュ。参考になったぜ」

ここで俺は、女の子である事を隠しているシャルロットの着替えの時間を稼ぐことにした。

「だが、まだちょっとは時間がある。一夏、俺の武器貸すから、もう少し射撃訓練してみりゃどうだ？」

「ぜひと」

「じゃあ、僕は先上がるね」

「おう」

「シャルル、今日は事情聴取で飯作る時間が少ないから、下ごしらえだけでも頼めるか？」

「分かった。じゃあ、また後でね」

シャルロットはそう言うと、ふわりと上昇してアリーナゲートまで飛んでいった。

「さあ、どれにする？」

空中投影ディスプレイを起動し、1号機が所有する武装の一覧を表示する。

「あれ？ 1号機に『ビーム・ライフル』なんてあったっけ？」

「それはこの間束姉が送ってきた試作品。データ収集を任されてるんだ。ちょうどいいから、これを使うか」

ビーム・ライフルの使用許諾を一夏と白式に発行する。

直後に構成されたそれは、コンデンサーや収束装置がやや大きく、ごてごてとしていた。

「持ち方は基本的にはシャルルが教えてくれた形で構わない。：

…そんな感じだ。標的を狙って1発撃ってみてくれ」

一夏が引き金を引いた瞬間、ビーム特有の甲高い音が響き、銃口から赤紫色をした一条のビームが発射された。

ビームは標的に一瞬で着弾し、それを爆発させた。

「……全く反動が無いな」

「火薬銃とは原理からして違うからな。こっちの方が威力に優れる反面、連射速度や信頼性に欠ける部分も多い。それに光学兵器だから、隠密行動には全く向いてないってのもあるな」

それから10分程銃についてのレクチャーをした後、俺は職員室で約2時間の事情聴取を受け、げっそりとした状態で部屋まで戻って

きたのだった。

例え、自分のしている事で地獄に堕ちようとも……

事情聴取後、俺は覚束ない歩き方で部屋に向かっていた。

「ユーグ、大丈夫か？」

隣で付き合ってくれた一夏が問いかけてくる。それが堪らなく嬉し
いんだが、生憎今の俺にはそれに答える程の気力すら残っていないか
つた。ひらりと一回手を振ると、自室のドアを開け、中に入った。

テーブルの上にはサラダとビーフステーキ、ご飯とお茶が2セット
置いてあり、「先に食べてていいよ」という置き手紙までしてある。

「いただきます」

下ごしらえだけでいいとは言ったが、ここまで作ってもらったのだ。
食べない訳にはいかないだろう。

早速ビーフステーキを一切れ切って口の中に放り込む。中まで火が
十分に通ったそれは中々に美味しく、ご飯との相性もバツチリだっ
た。

「わあああつー！」

突然響くシャルロットの声。彼女は シャワールームか。
俺は、『何の躊躇いもなく』シャワールームのドアを開いた。

そう。何の躊躇いもなく。

「ユ、ユーグ、ゴ……ゴゴッ……ゴキブリいっ！」

どんつと、俺の胸にシャルロットが飛び込んでくる。……って、これは不味くないか？

そんな事を考えつつ、俺は横の棚に置いてあった殺虫スプレーを、黒くてしぶといアレ目掛けてぶっ放した。

『……………』

さっきの騒動から数十分後。浮かない顔で夕食を口にするシャルロットの姿があった。

その服装は、いつもの部屋着であるジャージなのだが、普段のシャルロットなら絶対に無い物があった。

胸である。

恐らくさらしかコルセットか、その辺りで隠してたのだろうが、さっきの騒動で裸を俺に見せてしまった事もあってか、それをせずに脱衣場から出てきたのだ。彼女が気付かなければ黙認していたのだが、しっかりと自覚していたらしい。

自覚があるのなら、話すべきかな。

「……………実は」

シャルロットがこちらを見る。その瞳に、いつもの人懐っこそうな

光は無い。

「実はだな、お前が女の子だった事、薄々は気付いてた」

「そう、なんだ」

彼女の実家であるデュノア社は、第二世代型機『ラファール・リヴアイヴ』のシェアが世界第三位の大手ISメーカーのだが、元々ラファールの開発が第二世代型の中で最後発だった為にデータが不足しており、また、欧州連合の防衛の要となるISを決めるコンペティションである『イグニッション・プラン』に、各国の第三世代型が名を連ねている中、第三世代型を開発出来ない事から、経営危機に陥ってしまった。

更に追い討ちを掛けるように、国産の第三世代型を一刻も早く開発させたいフランス政府により、開発費用援助の縮小、イグニッション・プランの制式採用機体確定までに第三世代型の開発に成功しなかった場合のIS開発ライセンス剥奪までも言い渡され、後にも退けない状況になってしまったのだ。

そこでデュノア社は、シャルロットを3人目の男性操縦者に仕立て上げ、学園に編入させたのだろう。

「男性操縦者とそのISのデータが欲しかったんだろ？」

「そう。……端的に言えば、スパイをやったんだ、僕は」

……知っている。

君が親父さんの愛人の子だから、お母様が亡くなられてから今まで、光の無い生活をしてた事も、知っている。

だから、話そう。俺の事を。

「……俺、実は篠ノ之博士の弟分みたいな人間なんだ」

「えっ、いきなりどうしたの？」

「いや、俺がお前の事を知ってるのに、お前が俺の事を知らないのが、何だか気に入らなくてな。続けるぞ。弟分みたいな人間だが、実の弟じゃあない。俺は篠ノ之じゃなくてラインブルグだからな。じゃあ何故そうなのか？俺はちっちゃい頃、両親に捨てられたからだ」

シャルロットが息をのむ。

「正に迷子の状態で、行く当てもなく泣いてたら、彼女が見つけてくれて、彼女の家まで連れていってくれた。しばらくは塞ぎ込んでたけど、ずっと一緒に暮らしたら、いつの間にか姉弟みたいになつてたんだ。……と、まあこんな感じだな。ところでシャルル、これからどうしようか？」

「どうするって……バレちゃったし、本国に呼び戻されて、良くて牢屋行きかな。デュノア社は、潰れるか他企業の傘下に入るか、って所だろうね」

「俺が聞きたいのはそんな事じゃない。どうしたいかを聞いてんの」「犯罪者の僕に、選択肢なんて無いよ……」

うーん、完全に諦めてやがる。

にしても、特記事項は犯罪者相手には使えないだろうし、どうするかなあ。……あ。

「どうせだから、親父さんと取引するか」

「えっ？」

「ふっ、篠ノ之束の弟を、舐めちゃいけないよ」

言いながら、俺はノートパソコンを起動。

「何をするつもりなの？」

「見てりゃ分かる」

そう言うと、俺はデュノア社のメインコンピュータに侵入した。

「ちよつと、そんな事したら」

「俺を甘く見るな。こつやつて国や企業のコンピュータにハッキング掛けるのも、もう何度目か分からん。束姉の特殊回線使えば、足なんぞ取られる事は絶対に無いしね。なあ、本名は？」

「……シャルロット。シャルロット・デュノア」

「OK」

小声で話しつつ、目標のデータまで到達する。道中で不正取引のデータも見つけたので、手札に取っておく。

「さて、賢明な方だといいがね」

数十分後、俺は機械音声を使い、シャルロットの親父さんと直接会話し、取引を取り付けた。

そこで聞いた話だと、どうやら親父さんはシャルロットにここまでさせるつもりは無かつたらしく、お嫁さんがシャルロット大嫌いで、今にも殺してしまう位の勢いだったので、IS学園へ入れてやる事で、彼女から守つたらしい。男装はフランス政府から命令されたそつだ。

念の為会話が録音されていないか等をチェックしたが、それらは見つからなかつた為本気と判断。甘かつたかもしれないが、嘘だつたとしても、デュノア社の不正データが手元にあるから問題はナツシング・ヒューマンライフ。

そして、俺は学園上層部との交渉、織斑先生への説明を、束姉に頼

んだ。

学園上層部といえど、取引においては束姉にはかなわないのだ。

数分後、束姉から再入学扱いにしたという連絡が入ってきた。ここからはシャルロットの力だ。

「……今度の学年別トーナメントの翌日から、再入学扱いになる。みんなには謝らないといけないが、それでもいいか？」

「……どうして、こんな事が平気でできるの？ 怖くないの？」

信じられないといった表情で、シャルロットがそう問いかけてくる。

「自分の守りたい物の為にやってるんだ。怖い訳あるか。それに、こんなんでビビってるようじゃ、束姉の弟は務まらないよ」

「守りたい、物……？」

「身内の、守りたいと思った奴の笑顔。お前もその中に入ってるからな」

少しずつではあるが、シャルロットの目に光が戻ってくる。

「守りたいと思った奴を守る為なら、例え、自分のしている事で地獄に堕ちようとも……だ」

「ありがとう……僕、そんな事言われたの、お母さん以外で初めてだよ」

何時もの笑顔に戻ったシャルロット。そこに絶望の色は、全く見えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9816t/>

IS ~ Blue Destiny ~

2011年11月19日16時18分発行